

『保元・平治の乱を読みなおす』 元木泰雄 著 (日本放送出版協会) 243p.

保元・平治の乱は貴族から武士の時代への転換期を象徴する重要な事件です。この二つの乱の発端は、天皇家や院近臣の対立が最大の要因だと捉えられています。しかし、著者はこのような通説に基づいた見方は見直されるべきだと主張し、実際には源師仲や藤原成親など、多くの貴族たちの利害関係もからんでいたと述べています。また、武士が台頭する以前から、藤原頼長・信頼といった貴族たちも独自の武力や武士の性質を持っており、そのことが保元・平治の乱に結びついたことも著者は指摘しています。

本書では、保元・平治の乱に関与した人々の人物像、人間関係や思惑、その当時の時代背景や政治状況や実際の乱の様子などを詳細に検討することによって、今まで見えなかったその時代の様子、登場人物の姿を浮き彫りにしています。保元・平治の乱を今までの通説とは異なる視点から見る事が出来る良い書物でもあると思います。

210.38-Mot

『蘇我氏の正体：日本書紀が隠そうとした真実』 関裕二 著 (東京書籍) 261p.

蘇我氏と言えば、まず「悪」というイメージが想起されることでしょうか。しかし、蘇我氏は本当に「悪」なのでしょうか。

本書では、藤原不比等たちによって編纂された『日本書紀』の記述の疑問点を突き詰め、その中に隠された真実を、その当時の政治背景、大化改新後に起こった出来事、蘇我氏がまつられた入鹿神社や山田寺にまつわる由来などと照らし合わせて明らかにしています。そして著者は、蘇我氏の寺社の調査や神話の研究から、スサノオが入鹿神社にまつられていることを発見しています。また、蘇我氏の祖先とされる武内宿禰の生まれや行動などが、スサノオやサルタヒコなどと類似点が見られると述べている点も本書の興味深いところと言えます。

通説とは違った、知られざる蘇我氏の姿を見る事が出来るお勧めの一冊です。

210.3-Sek

『日本史・世界史 同時代比較年表：そのとき地球の裏側で』

楠木誠一 著 (朝日新聞社) 222,24p.

日本で何か重要な出来事が起こった頃、世界はどのような時代を迎えていたのでしょうか。ふとそんなことが頭の奥で思い浮かんだことはありませんか。

本書は、紀元前一万年前から現代(1989年)までを通して、日本と世界(ヨーロッパ、アジアなど)の歴史を対比し、両者の間で同時代にどのような出来事が起こっていたか、またその時どのような人物が登場していたのかなどに焦点を当てています。その中には、存在や場所については明言していませんが、「キリストの墓保存と卑弥呼の墓建造」といったほぼ似通った組み合わせもあれば、「関が原の戦いとハムレット」といった殆ど似通っていないものも存在します。

日本史と世界史。その間では、常に思いもかけないような出来事が絶え間無く起こっています。日本の動きだけでなく世界の動きにも目を向けてこそ、歴史というものの姿、面白さというものがより理解できるのではないのでしょうか。「年表」とはいえ、読み物形式ですので、皆さんにとって親しみが持てる書物であると思います。

209-Kus



いながき ひろゆき(係)